

# おひざのうえで 2025②

(副園長の子育て応援 Letter)

## 「けんかや葛藤から育つもの」

せんりひじり幼稚園 副園長 安達かえで



新しいクラスに慣れてきて、園内のあちこちで友達と一緒に楽しそうに遊ぶ姿が見られます。友達と楽しそうに遊んでいる姿を見ると、私たち大人も嬉しくなりますよね。ずっとそうあってほしいと願ったりするでしょう。ところが、人と人が共に過ごすとなるとそうはいかないものです。幼稚園で一緒に過ごすということは、自分と違う存在がいて、思いのぶつかり合いも必然的に起きるということです。

先日も、年長の子どもたちの中で「言った・言わない」のやり取りが園庭で起こっていました。「先に言ったのは〇〇やで」「ぶつかってきたのは〇〇くん」「なにもしてないのにぶつかられてイヤやった」「わざとじゃないよ」「そのまえに言った」など、互いの主張が飛び交います。何が原因なのかどうしたらお互い気持ちよく終われるのかの思いを巡らせながら考えたのでしょう。最終的には、ぶつかった子が「わざとじゃないけど、ぶつかってごめん」と自分の気持ちを言葉にして謝る姿が見られました。周囲の子どもたちも、それぞれの視点から出来事を語り、自然と小さな“話し合いの場”になっていたことに、年長児らしい成長が感じられました。このような喧嘩や葛藤は、実は子どもにとって非常に大切な学びの機会です。



こうした経験を通して、子どもたちは「自分の思いをどう伝えるか」「相手の気持ちをどう受け止めるか」「どうすれば解決できるか」といった、社会で生きていく上で大切な対人関係の力を、実感とともに身につけていきます。

幼稚園生活の中で起こる「いざこざ」の種類は様々で、年齢や時期によっても違います。

3歳児のこの時期のいざこざは、モノや場所の取り合いが多く、まだ言葉で自分の気持ちを表現したり相手の気持ちを理解するのが難しいため、保育者が気持ちの交通整理をしながら一人一人の思いを代弁したり、気持ちの切り替えを促したりします。気が済んだら何事もなかったかのようにまた遊び始めますが、3歳児のいざこざは、相手の思いに触れたり、自分の感情を言葉で表す機会になっています。

4歳児はいざこざがあると、周りの子どもたちも「どうしたの」と寄ってくるが多くあります。当事者のやり取りをそばで見ている周りの子も、当事者同士のもめ事を介して学んでいきます。先生がお互いの気持ちを丁寧に聞き取り、それを言語化して話し合いの補助的な役割を担

います。最終的に「どうしたい？」という問いかけを通じて、子ども自身が考え解決策を導き出す経験を積むことができます。こうした過程を繰り返すことで、「自分たちで解決できた」という自信と達成感が育まれていきます。

5歳児になると、小さなもめ事であれば、「先生はいいから・・・」と自分たちで解決しようとする姿が見られるようになります。一方で、自分にとって不利なことをうまく理由を付けて「やってない」とごまかしたりやっていない当番の仕事を「やった」と言ったり、状況が複雑になり、他の子どもたちも解決の糸口を見つけられないでいることがあったりします。そんな時は、先生が「本当にそれでいいのかな？」と子どもの心にゆさぶりをかけることがあります。自分のやりたいことと、集団の中でのあり方との間で揺れ動く中で、子どもは自分の言動を見つめなおし、社会的倫理的にどうあるべきかを考える力を育みます。

これらのことは、先日保育学会で年少組学年主任の谷邨ゆま先生を中心にポスター発表した「幼児期の人間関係における葛藤と成長」という研究の結果をもとに考えたことです。3学年で共通してみられるのは、先生たちの共感的な関わりです。「そんな気持ちだったのね。」「自分で言えてよかったね。」「正直に話してくれてありがとう。」といった言葉かけによって、子どもは安心感と自信を得て次の一歩に踏み出すことができます。

喧嘩やいざこざを大人がすぐに解決してしまうと、子どもは「自分の力で乗り越える経験」を積む機会を失ってしまいます。幼児期に葛藤と向き合い、対話によって乗り越える経験を重ねることは、やがて学校生活や思春期の対人関係におけるトラブルにも、建設的に向き合える力の土台となるのです。

クラス懇談でも、園長から話がありますが、「感情リテラシー」の不足による小学校での校内暴力増加の話や、大人になってから事件に巻き込まれる率の高さなど、自分の感情を言葉によって表現することの大切さが問われています。

しかし、自分の気持ちを言葉で表現するのは簡単なことではありません。語彙力や対人関係への関心、気質の違いによっても、その力の育ち方は様々です。気持ちを伝えたいのにうまく言えず、もどかしさを抱える子もいれば、強い思いを持つがゆえに感情のコントロールに苦労する子もいます。大人がその子の「しんどさ」や「葛藤」に共感しながら、寄り添い、乗り越える力を支えていくことがとても大切です。

子どもは一人ひとり違う存在です。それぞれの子にとって、「いざこざ」や「葛藤」は、ただのトラブルではなく、心の成長に繋がる大切な機会。私たち大人がその経験を丁寧に受けとめ、支えていくことが、未来につながる大きな力になると信じています。